

服飾史家である中野香織さんと、映画評論家で字幕翻訳家の齋藤敦子さんの往復書簡的コラム。ファッション誌の映画コラムニストとフランス映画社宣伝部長として出会った中野さんと齋藤さんは、以来十数年、友情を育む。この連載では、イギリス文化とフランス映画という専門分野をベースに映画談義が交わされる。

ドーバー 越えて

往復連載

齋藤敦子
中野香織



FROM United Kingdom
中野香織 64

さめて完璧、ビリー・ボブ

なまりのあるフランス語となまりのないフランス語を聴きわけるなんて、さすがフランス語に堪能な敦子さん。わたしにとってはアダム・サンドラーとベン・スティラーを区別するのと同じくらいむずかしい。「50回目のファーストキス」に「おまけつき結婚生活」と、このふたりそれぞれが主演するコメディを続けて見たんですが、ともにお相手がドリユー・バリモア、笑うに笑えない肉弾系押しつけギャグ満載、とい

うあたりも含めて、かもし出す雰囲気がないんだか似てるんですよえ……。

とはいえ、「50回目の〜」のほうには、不覚にも泣かされてしまいました。前日の記憶を失ってしまうバリモアに、毎日毎日、あの手この手で自分に恋をさせるサンドラー。バリモアのほうは、記憶はなくとも実は無意識にしつかり彼を刻みつけていた……。つてことが明らかになるクライマックスでは、もうボロ泣き（疲れていたのか）。ともあれ、ありえないファンタジーですっかりいい夢見させてもらいました。いい夢でしばし憂き世を忘れさせてくれる映画があるとすれば、シビアな現実を切りとって憂き世に立ち向かう希望をくれる



「プライド 栄光への絆」ユナイテッド・シネマにて上映中

オブジェ制作=井上陽子

ような映画もあって。

前々から騒いでいる「プライド 栄光への絆」のことです。アメリカの田舎の高校生のアメフトの映画なんだけど、これ、宣伝会社さんがうたうようなスポ根映画じゃないですよ。アメフトのルールもろくに知らないわたしですら、「今年の上半期ナンバーワン」に決めちゃったんですから。宣伝の方向があまりにもまちがっていて、観客が限定されてしまうんじゃないかと思うと、もう、もったいなくて。コーチ役のビリー・ボブ・ソーントンさんの演説のセリフなんて、大江健三郎様のお言葉、蝶々先生のお教えと並べて（シユールなラインナップです、はい）、〈お守りワード〉として机上に飾ってるほど。

「完璧、とはスコアボードまわりのことではない。やれることはすべてやった、と曇りなき目で友の目を見て言えることが、完璧ということだ」

これを語るビリー・ボブがまたシブいの。パンフレットには熱血コーチみたいに見えるんだけど、これも微妙に違って、どっちかといえ、さめた諦念のほうを濃く漂わせてる男。でもそれだからこそ熱血漢よりも言葉に深みがにじむんですよ。不利な条件だらけ、プレッシャー巨大、逃げ場ナシ、勝ち目ナシ、のフィールドに投げ出されて絶望しかけているすべての人におすすぬめ！ と今回は一人宣伝ボランティア。